

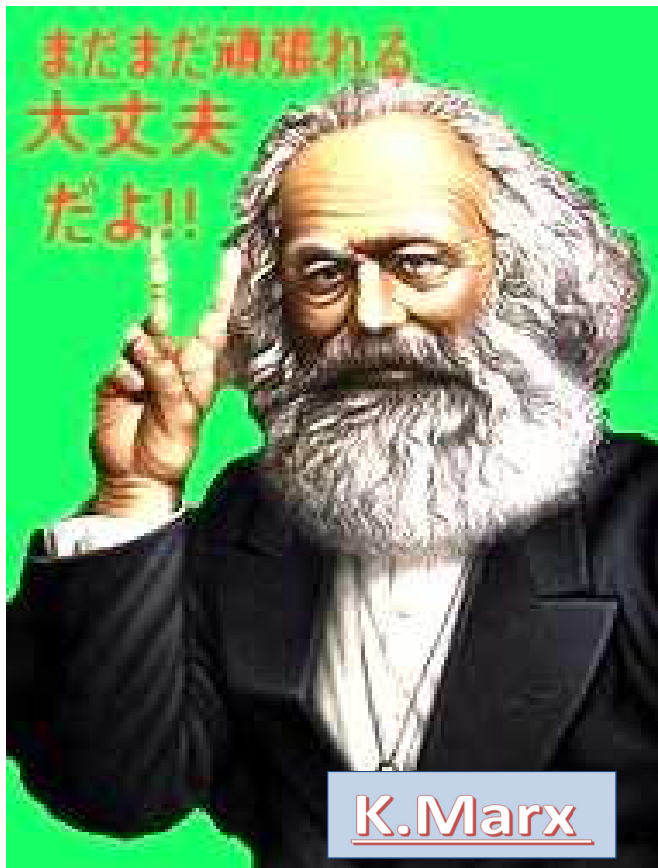
## 第86回「資本論を読む会」の案内

☆次回は-4月27日（月曜日）

午後6時30分からZoomで開催

第13章「生産期間」第14章「流通期間」[岩波文庫(四)p351～p378]

# DAS KAPITAL



第85回「資本論を読む会」は3月30日に開催しました。久しぶりに参加者は10名と、少し賑やかになりました。今回の「第12章労働期間」はマルクスの規定する新しい概念の整理です。次の「生産期間」と「流通期間」に続くものですね。

前回までの「第2篇 資本の回転」の「固定資本と流動資本」についての理解は「少し難しかった」印象が残っています。とくにアダム・スミスやリカードが出てきて、その理論的批判は背景が分からないので”ちんぷんかんぷん”？ 今回のテーマ「労働期間」は素直に読み込めたと思った人が多かったのではないのでしょうか。

始まりは「等しい大きさの労働日、たとえば10時間の労働過程をもつ二つの事業部門、木綿紡績と機関車製造」を例として、これが完成品として出来上がるのにかかる労働日は、もちろん違うことは分かります。

「(労働期間は)一定の事業部門で一完成生産物を供給するに必要な相関連する諸労働日の数を意味する。」(p339)とあります。今回は、これだけ理解しておけば良いのではないかな

ーと言うと、暴論かもしれませんが…。今回のレポーターはSaka爺さん。次回はKusiちゃんです。よろしくお願いします。

懇親会はやはり総選挙総括がらみの議論になったように思います。前日の3月29日に立憲民主党の本部大会も開かれてきていますが、「中道」改革連合についての評価、今後についてはまだまだ不鮮明ですね。どういう形になったとしても、今より悪くはならないでしょうーということでお開きにしました。

「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから- Saka爺さん

### 第12章 労働期間(P336～)

◎ 各産業部門における労働期間の相違は、資本の前貸し期間の差異をもたらす。恐慌などの社会的生産の中断に際しても、労働期間の短い綿糸生産などでは、新たな生産がされなくなるだけであるが、労働期間が長い機械製造などでは、生産物が完成途中で放棄されるため、それだけ資本への影響は大きい。

◎ 資本家は、資本の回転を早めるために、この労働期間を短縮しようとするが、それはたいてい機械設備の使用など、固定資本の投下の増大と結びついている。ただし、鉄道建設業などは、労働者の大量投入でも労働期間を短縮して、資本の回転時間 をすることができる

◎ 労働期間の短縮が実現される度合いは、産業部部門によって異なる。自然条件による制約が大きい農業や畜産業などは、労働期間の短縮は難しい。

また、新たな道具の使用によって、生産に必要な労働期間が絶対的に短縮される。